

〔科目名〕 学 習 導 入 演 習	〔単位数〕 2 単位	〔科目区分〕 アカデミック コモンベシックス
〔担当者〕 横 手 一 彦 YOKOTE Kazuhiko	〔オフィス・アワー〕 時間：開講時に提示する 場所：横手研究室(616号室)	
<p>〔科目の概要〕</p> <p>大学で〈学ぶ〉ということは、どういうことなのだろう。高校までの勉強と、どこまでが同じで、どこからが違うのだろう。大学一年、入学した春学期の、そのような戸惑いは当然のことである。また、自然なことでもある。</p> <p>この科目は、これまでの「学習」という土台の上に、大学における〈学ぶ〉筋道を示すような形で、疑問や不安に応えるようにする科目である。新しい学問領域に接するではなく、〈学ぶ〉ということに対する応答が目的の一つである。そのため、入門的な内容になる。</p> <p>ひとり一人が、今後の四年間をみすえ、その初年度の春学期に、〈学ぶ〉という自覚と、〈学ぶ〉という姿勢を自らに引き寄せる。教員の立ち位置は、それらを側面的に支援するところにある。教員は、側面的であるという以上に進むことが出来ない。</p> <p>〈学ぶ〉ことは、〈勉強する〉こととは、やはり違う。その違う部分を、最も大切にしたい。</p> <p>加えて、自分の文章を書く、自分の論文を書くという方向へと段階的に進める。</p>		
<p>〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつか〕</p> <p>気づかなかったことに気付く。知らなかったことを知る。それらは、単純なことのようで、それほど簡単ではなく、深い意味を持っている。その底辺は、自らの意欲と関わる。</p> <p>自分が〈学ぶ〉という一面に、自分以外の人から〈学ぶ〉という側面を重ねることで、これまでの自分の行為に自覚的になる。これは大切な点であり、それに正面から向き合おうとすれば、相手(他者)は、意外なほどに手強いし、また凄惨な存在でもある。自分のため、安易な自己満足は許されない。</p> <p>これまでと、いまに立ち返り、もう一度見つめ直せば、必ずしも十分ではなかったと気づく。この隙間(すきま)を埋める。「自分が」「自分で」「自分の」、である。誰かは手助けしてくれるが、その代理や代弁を務めることはない。</p> <p>大学で〈学ぶ〉というプロセスは、約(つづ)めれば、物や事や人や考え方や情報などに向き合い、そこから特定の事柄を対象化し、その関わりに自らの課題を発見する。そして、分類し、分析し、考察を深め、独自に調査し、議論を重ね、さらに論究を続ける。そのような、連続する流れとしてある。その成果の多くは、レポートの形にまとめられる。</p> <p>それらを、意図的に、段階的に、踏み上がる。そのことで、自らが〈学ぶ〉自覚と、自らが〈学ぶ〉姿勢を具体的に引き寄せる。それらが、大学という場で〈学ぶ〉基礎となる。</p> <p>「自分が」「自分を」、励ます以外に手立てはない。自分が苦勞して書き上げたレポートに、自分を励ます力が宿る。〈学ぶ〉階梯を自立的に歩み、そこから習得したものは、大学四年間の〈学び〉の要になる。</p>		
<p>〔科目の到達目標 (最終目標・中間目標)〕</p> <p>〔中間目標〕</p> <p>幾つか問題について意見を交換し、相互の理解を深める。それらを文字化して表現する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 方法的接近(本という形態・基礎的な理解・幾つかの簡素な論理・古い図書館・外国の図書館・今の図書館) 2. 方法的接近の具体例(級友・図書館文献・文献検索・ネット情報) 3. 口頭発表(本に学ぶ) <p>〔最終目標〕</p> <p>自分が、〈学ぶ〉主体であると改めて気づき、実感的に知り、実践を重ねる。小レポートや課題レポートの作成を通じ、自らが〈学ぶ〉ことに対し、自覚的に、意欲的になる。それを最終目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去の実践例に学ぶ(批判的な論究) 2. 現在の課題意識、関連資料の収集と整理、分析的思考と論理に基づいた構想力。それらの文字化(レポート作成)。 		
<p>〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教壇に立つ側が饒舌に過ぎる場合がある。それを自戒し、教場における学ぶ主体は、学生であると自重する。 2. 教員の用意する話題が、脈絡に欠けると受け取られた時があった。一部の話題を組み立て直し、流れのある展開となることを心掛ける。他方に教材開発に努め、多種、多様であるという側面を維持する。 		

3. レポートの書き方について、事例を紹介し、その実践を求める。	
[教科書] なし	
[指定図書] なし。	
[参考書] 佐藤望編著『アカデミック・スキルズ大学生のための知的技法入門』第2版(2016、慶應義塾大学出版会)など	
[前提科目] なし。	
[学修の課題、評価の方法](テスト、レポート等) 教場における積極的な姿勢や課題解決への意欲など2割、口頭発表1割、小レポート2割、課題レポート5割。	
[評価の基準及びスケール] A: 100点～80点 B: 79点～70点 C: 69点～60点 D: 59点～50点 F: 49点～0点	
[教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望] 自らが学ぶという意欲。 級友と学び、級友が学ぶ姿勢への共感。 レポートという表現行為への深い関わり。	
授業スケジュール	
第1回	<p>テーマ(何を学ぶか): 科目導入の初期段階への接近 内 容: 1.大学というところ 2.大学生ということ 3.自分が学ぶ 4.高校生と大学生 5.中学生と高校生と大学生</p> <p>教科書・指定図書 なし 以下同じ</p>
第2回	<p>テーマ(何を学ぶか): 教員による科目内容の方向付け 内 容: 1. 各自の事前学習 2. 大学図書館というところ 3. 図書館図書の選定(新書版程度) 4. 口頭発表(本に学ぶ5分程度3人) 5. 例.西行 桜 6. 例.広瀬淡窓</p> <p>教科書・指定図書</p>
第3回	<p>テーマ(何を学ぶか): これまで自分 今の自分 これからの自分 内 容: 1. 自分の過不足 2. いまの自分に必要なこと 3. 方向性・構想・具体的な展開 4. 考えるということ</p> <p>教科書・指定図書</p>
第4回	<p>テーマ(何を学ぶか): 多様な知1——教科書と教科書以外に学ぶ1 内 容: 1. 科学的思考 2. 大学という教育機関 3. 他人が組み立てた思考方法を学ぶ 4. 自分と自分以外との関わり 5. 研究ということ</p> <p>教科書・指定図書</p>
第5回	<p>テーマ(何を学ぶか): 多様な知2——教科書と教科書以外に学ぶ2 内 容: 1. 例.戦前の新潟の農民の子 2. 小学校を卒業した後に大学の教壇に立つ 3. 例.戦後の大阪生まれの子 4. 高校を卒業した後に大学の教壇に立つ</p>

	5. 自分を考え直す 6. 小レポート作成 教科書・指定図書
第6回	テーマ(何を学ぶか): 多様な知3——教科書と教科書以外に学ぶ3 内 容: 1. 学内の施設訪問(施設見学だけを目的としない 雨天等の場合は刈頂延) 2. 施設を実見 施設的设计構想 構想を形にする 教科書・指定図書
第7回	テーマ(何を学ぶか): 中間的のまとめ 内 容: 1. もう一度——大学というところ 大学生ということ 自分を語るということ 2. 現代に生きる 現代を生き続ける 3. 学生の小レポート紹介 4.例ハンガリーの医師 教科書・指定図書
第8回	テーマ(何を学ぶか): 人類史的な系譜——ヒトと人 内 容: 1. ヒト 2. 種と採取と栽培 針と糸 3. 人に生まれる→人となる 4. 人として歩む→人として生きる 教科書・指定図書
第9回	テーマ(何を学ぶか): 人として生きる 内 容: 1. 学びの四パターン 2. 学問への切っ掛け 3. 真つ当に生きる 4. 小レポート作成 教科書・指定図書
第10回	テーマ(何を学ぶか): 「3.11」に学ぶ1 内 容: 1. 「3.11」に学ぶ 2. 破壊の現実生きる 3. 出来事に学ぶ 経験に学ぶ 人に学ぶ 考え方に学ぶ 教科書・指定図書
第11回	テーマ(何を学ぶか): 「3.11」に学ぶ2 内 容: 1. レポートを書くために 2. レポート作成の目論見書の作成 教科書・指定図書
第12回	テーマ(何を学ぶか): レポート作成の実践1 内 容: 文字で表現するという事 文章表現の基礎的な項目 教科書・指定図書
第13回	テーマ(何を学ぶか): レポート作成の実践2 内 容: 意見交換と文章の手直し 教科書・指定図書
第14回	テーマ(何を学ぶか): レポート作成の実践3(レポート作成の最終段階) 内 容: 論理的な展開 主張の明確化 文章全体の再検討 教科書・指定図書
第15回	テーマ(何を学ぶか): 〈学ぶ〉ということ まとめ 内 容: 1. 15回の演習を振り返る 2. 要点を確認する 3. 意見の交換 4. 自らの到達点の確認 5. 自らの未達点の確認 教科書・指定図書
試 験	「3.11」について4000字以上のレポート提出(試験なし)